

2018
おもろ
チャレンジ

日本の家庭内の食品ロスを減らす鍵を探しに

経済学部 3年

真井 奏

フランス、スペイン、イタリア

2019年1月31日-

2019年3月1日



渡航概要と内容

渡航動機

京都大学に入学して三年目。一人暮らしの生活には慣れてきたが、未だに格闘していることがある。それは食材を使いすぎるのだ。スーパーに陳列される食材は私には多すぎるが、既に梱包されて売られているため必要な分だけを購入できない。私は上手に食材を使いきれずに捨ててしまう。

近年、企業による食品ロスの問題をよく耳にする。恵方巻の大量廃棄問題に関するニュースは記憶に新しいだろう。しかし実は、日本の食品ロスの半分は家庭内から出ているのだ。そしてそれは世界食糧援助量に匹敵する量なのである。原因の9割は過剰購入による賞味期限切れと食べ残しだ。食品ロスは私だけの問題ではなく、日本の深刻な社会問題である。しかし日本では食品ロスに対する関心や画期的な解決方法が生み出されていない。そこで私は海外に目を向け、食品ロスへの関心が高いヨーロッパ、特にフランス・スペイン・イタリアにて現地の取り組みに焦点を置き調査を行った。

調査内容

家庭内の食品ロスを解決には①余剰な食材の有効活用②過剰購入の抑制の二つの軸が必要であると考え、それにそって今回は以下の二つを調査した。一つ目は食品の地域共有システムの、“連帯冷蔵庫”だ。これは公共の場や大学といった人々が集まる場所に設置された”誰もが食べ物を置き、持っていける”冷蔵庫で、食品ロスを解決すると同時に食料不足の方々へ届けることができる。今回はここで、設置者と利用者（食品を寄付する人・食品をもらう人）に聞き取り調査を行った。それに加えて、連帯冷蔵庫を設置したにも関わらず撤去されてしまった人にもインタビューを行うことができた。

以下インタビューの抜粋

「私は小学校の先生をしていて社会的地位が高い。もし公的に援助受けているのが生徒や生徒の親に見つかって、噂になったらどうしようという不安から、気が引けて援助制度を活用できない。一方でこの冷蔵庫は登録等もいかに気軽に利用できるのがうれしい。」(30代 小学校教諭)

「明日から帰省で家を長期で空けることになるため、残った食材を持ってきた。」(20代 大学生)

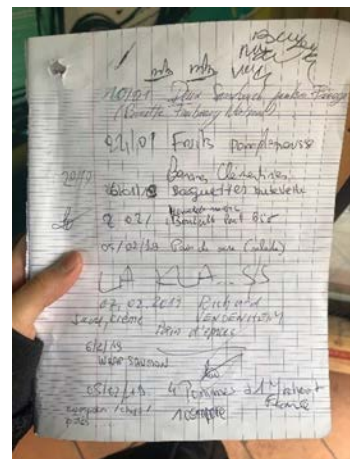
「僕はここから昔サンドイッチをいただいたので、今日は代わりにサンドイッチを持ってきた。これがだれかの飢餓を救えたらうれしい」(20代 ホームレス)



現地で見つけた、連帯冷蔵庫ならめ
連帯自動販売機
(スペイン パレンシア)



連帯冷蔵庫の隣に見切り品のような
食材が入った段ボールも置いてある
(スペイン パルセロナ)



誰がいつ食材を置いたかを
書き留めるノート
(フランス ストラスブル)

二つ目は、量り売り文化の分析である。最近ヨーロッパに増加している“ゼロウェイストショップ”の実態調査を行った。ゼロウェイストとは言葉の通り、ごみを出さない運動である。日本で浸透するリデュース・リユース・リサイクル、つまり3Rはゴミを減らすこと・ゴミを有効活用する事を目標としている。しかしゼロウェイストはそもそもゴミを出さない運動である。ゼロウェイストショップは食材を持参の容器に自分に必要な分のみ購入可能なお店である。これによって、包装容器のごみも食べ残しも出さないようにするのだ。また他にも人々の生活に根付くスーパーやマーケットの比較も行った。



ゼロウェイストショップにおける購入方法の見本
(フランス ストラスブール)



スーパーにおける
量り売り
(フランス パリ)



街中の包装されていない市場で売られて
いる野菜
(イタリア ローマ)

渡航中に起こったトラブルとその対処法

・公共交通機関の運行情報

現地での公共交通機関は日本とは大きく異なる。というよりは五分遅れでも遅延証明書を発行し、正確な時間、完璧な運行が当然である日本は異常なのかもしれない笑 渡航前に作成した研究計画では移動手段の正確性は考慮していなかった。電車・バスの時刻表まで考慮してスケジュールを立てていた私は結構苦労した。例えばバルセロナ滞在中にストライキが行われて大幅に運行数が削減されていたのだが、ホームページにも英語での記載がなく、ただ永遠に待つことしか私にはできなかった。加えてバルセロナではタクシーに決まった場所ではしか乗車することができず、バスや電車が使えないからといって簡単にリカバリーが聞くわけではない。つまり計画を立てる際は海外では相当な余裕を持ちましょう。

日本との文化の違いから苦労したこと

・言語の違い

日本語と英語しか話せない私は、現地の友人に基本的には通訳を頼んでいた。そのおかげで言語の壁も乗り越え、スムーズにインタビューはできた。しかし通訳の過程で失われたものは大きかったであろう。私には彼らの些細な表現や小話が理解できない。一方通行の質問攻めスタイルでは会話の過程で生まれてくる新たなトピックやお話も生まれにくい。また、通訳中によってできる間が会話の流れが分断されてしまう。もし、私が彼らの言語を扱うことができたならば、もっと色々な情報を引き出したかなと思うと非常に悔しい。

・バックグラウンドの違い

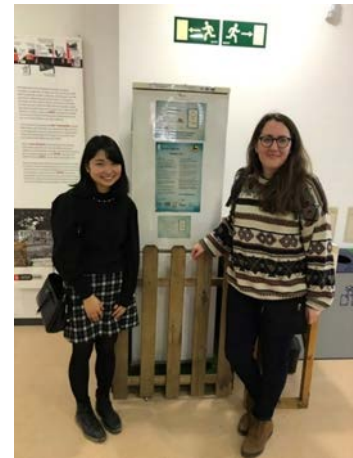
私と現地の人とのバックグラウンドの違いが生む、“常識”の違いは非常に厄介であった。たとえば、ボランティアを行う動機についてインタビューしたときである。相手は普段はサラリーマ



連帯冷蔵庫を設置したが撤去されてしまった方へのインタビュー
(スペイン ムルシア)

ンとして働き、週に二回午前中にボランティア活動を行っているそうである。これを聞いたとき私は非常に驚いた。ボランティアを会社員の方が平日に毎週二回も行うなんて日本では非常に珍しい（無理な）ことである。しかし、私にはフランスにおける常識がわからない。どのような働き方が“普通”であり、ボランティアに対する意識や考え方が

“普通”なのか分からない。仕事とボランティアを両立するための物理的・心理的ハードルも動機には鍵になってくるが、インタビュー相手を取り巻く環境を理解していない限り、大きな誤解が生まれてしまいうる。他にも連帯冷蔵庫が連邦政府によって撤去された事例を聞くために、設置者にインタビューを行ったことである。スペイン内の南北格差であったり、移民問題、NGO 団体と政府の癒着など。彼らの生活の中で生まれてくる感情や思い、気づき。それらを理解し、土台を合わせないことにはインタビューは難しい。まあでも、だからこそカルチャーショックを受け、どんどん知らない世界が見えてくるのが海外でのインタビューの醍醐味かもしれない。



連帯冷蔵庫使用者への
インタビュー
(スペイン バルセロナ)

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

“百聞は一見に如かず”。自分が想定していたことを上回る気づきがたくさんある。また現地の人々との対話の中で見えてくるものや、新しく知ることもある。確かに今はインターネットや書籍のように物理的な移動を行わなくても様々なことを知ることができる社会ではある。しかし、メディアには載らないような現地の人々の声や実情はもっと多くのことを教えてくれる。通信技術の発達により情報化社会といわれる現在でさえ、これだけ手に入れられない情報が眠っていることに気づかされた。自分で自ら足を運び、現地を生で見て、話しを聞く。これがどれだけ価値のある事かを気づけたことが何よりもおもしろチャレンジの一番の収穫である。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

具体的な方法はまだ決めていないがどのような形であれ、食品ロスの解決に向けて行動を起こしていきたい。特に共有冷蔵庫を置きたい！ただ冷蔵庫を公共の場に置く。この非常にシンプルな活動には大きな可能性が秘められていることを実感した。（ぜひ京大に置きませんか！！）また食品ロスの取り組みについてももっと調査していきたい。ヨーロッパの人々とのお話の中で新たな食品ロスへの取り組みを知った。大きな目で見ると目標は食品ロスの解決と同じなのに、様々な主体がユニークな方法で解決しようとしている。また海外という非日常の環境で文化・価値観など様々な刺激を受ける中で、未知の領域に出会い、勉強したいテーマが増えた。歴史的背景や政治情勢など。いくら時間と脳があっても足りないくらい知的好奇心が刺激された。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

できるだけ現地の人々と交流して、現地の生活に溶け込み、たくさん刺激を受けてきてください！自分の中の当たり前を壊し、彼らの目線や価値観を理解して来ててください。非日常を存分に味わい、カルチャーショックを受ける中でどんどん視野は広がるでしょう！

■ 主な奨学金の使途

*宿泊費

*渡航費

*現地交通費

*海外旅行保険 など